

質的研究による社会福祉の『実践知』の可能性 ～オントロジカル・ゲリマンダリングとアイロニーを越えて～

藤田 徹・庄司知恵子

ここで言う「実践知」は、特に洗練されたテクニカルタームとして提示しているわけではない。報告者の実践経験、あるいは研究活動を通じてイメージした、<いま-ここ>における実践と関連する知識、または「現場にとって役に立つ知識」、そういった意味として受け止めたい。そして、この「実践知」を改めて整理してみると、二つの要素が含まれた概念のように思う。一つは、動的な意味としての「実践」という流れがある。もうひとつは、静的な意味としての「知識」としての枠組みがある。つまり、ある点では、矛盾しあう意味の混合として「実践知」は成り立つものと言えよう。動いているものと止まっているものが共存するということがどうということなのか、難解さがそこに含まれている。

そして、この「実践知」を見極める上で、相対主義を標榜する社会構成主義、そして、それを基盤としたナラティブ・アプローチは、極めて有望な分析方法として期待を抱かせた。昨今の社会福祉研究領域においても、この社会構成主義およびナラティブ・アプローチは、社会福祉実践に対する新たな研究法として注目を集めている。社会構成主義は、バーガーとルックマンの現実の社会的構成の解釈とレイベリング論を基調として、スペクターとキツセによる「社会問題の構築」の著作によって形作られたアプローチである。「社会問題はなんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレームを申し立てる個人やグループの活動である」、つまり、「社会問題という実態があるから社会問題である」のではなく、「社会問題であるとクレームが申し立てられるから社会問題となるのだ」というレイベリング論的な枠組みを活用した社会問題分析に、その特徴がある。また、社会構成主義を理論的基盤とするナラティブ・アプローチは、言葉による「物語」や「語り」に極めて高い関心を示す。「物語」や「語り」によって現実が構成される、だから、「物語」や「語り」を変更することができれば、現実を変えることもできる、としている。これらの点において、社会構成主義並びにナラティブ・アプローチは、これまでの客観主義と決別し、相対主義の原則に立つ意図が理解できる。そういう点からも、「実践知」を検討するツールとしても極めて期待のできるアプローチと言えるわけである。

しかし、それに対して水を差す提起がなされている。

それがエスノメソドロジーの立場に近いウルガー達による「オントロジカル・ゲリマンダリング」という問題提起である。つまり、「社会構成主義は対象に対する態度として、都合のよいときだけ相対主義を適用する選択的相対主義である」、つまりオントロジカル・ゲリマンダリング（存在論上の恣意的線引）を行っているという指摘であった。

このオントロジーを、エスノメソドロジーの立場から、ガーフィンケルが<対応説>と<同一説>に分けて説明を行なっている。まず、<対応説>は、「現実の対象」とそれに対してまなざしを向け構築した「知覚された対象」を区別する考え方であり、結果的に、その「現実の対象」をよりの確にとらえられるのは研究者や科学者であり、本当の「現実の対象」に近い「知覚された対象」を導き出すことができるという論理が成立する。それに対して「同一説」は、「現実の対象」と「知覚された対象」を区別しない立場に立つ。つまり、「知覚された対象」こそが、「現実の対象」であり、相対主義の徹底を主張する。

つまり、ウルガー達は、社会構成主義（ナラティブを含む）が、これら存在論を、自ら「同一説」を標榜する一方で、その実、そこに「対応説」を滑り込ませていると批判する。岡田は、このことを、エスノメソドロジーの視点から、「成員が『説明（account）』行為という形で行なう対象の構成とその構成作業の隠蔽とを『説明』のもつレトロスペクティブ（事後的・遡及的）な性質に焦点をあてる『相互反映性』と『信頼』のしくみを実践のなかで見極める」ことで乗り越えられると説明した。また、それは同時に、社会構成主義の「対応説」の残余によってもたらされる「アイロニー」的限界の克服へも連動している。

これらの点において、「実践知」を言葉通りに捉えんとするならば、エスノメソドロジーの視点は不可欠であり、また、それによって構築された知見は、実践を導く「知識」として力を持つことにもなる。このことを報告させていただいた。

参考文献：岡田光弘著、「社会構成主義の現在：社会問題のエスノメソドロジー的理解を目指して」、年報筑波社会学、1994